

TEE プロジェクト（英語による英語教育）の基本理念

— 「英会話」廃止論の序として —

井 上 逸 兵

1. はじめに

本論においては、橋本功信州大学教育システム研究開発センター教授を中心として平成12年度より稼働し始めた、TEE (Teaching English in English・英語による英語教育) プロジェクトの基本的理念をプロジェクトメンバーの一人として論じてみたい。このプロジェクトはまだ立ち上がったばかりであることもあり、その論拠となる実証的なデータはいまだ十分ではない。いささか感覚的、思弁的な議論となるおそれがあるが、基本的なアイデアをご理解いただければとりあえず本論の目的は達せられることになる。

TEE, すなわち「英語による英語教育」とは、文字通り共通教育の英語教育を教師の母語が何語であるかに関わらず英語で行うというものである。TEE プロジェクトの最終的な目標は信州大学の共通教育における英語教育を英語によって行うためのカリキュラム上、および授業運営上のモデルを構築することである（むろんそれが実施されることが望まれるが、それは次元の異なる話となる）。具体的には「英会話」廃止を含めたカリキュラム改正（後述するが、これは英語のネイティブスピーカーによる授業の不要であることを意味しない—ある意味ではその重要性は増すかもしれない）、日本人教員へのFDの充実を提言することになる。

2. プロジェクトの理念的背景

本プロジェクトの背景の一つとして、特色あるカリキュラムづくりという、率直に言ってやや非本質的とも言える時代的な要請もあげざるをえないであろう。その是非もともかく、これについては多くを述べることはここではしないでおく。ただ時代の要請として、語学教育が「コミュニケーション志向」であるとするなら、大学教育、特に共通教育がそれに応えようとするのはいわば当然のことではあろうと思う。平成10年における信州大学の共通教育改革における語学教育に関わる基本路線もそうであった。しかしながら、その「コミュニケーション」の意味するところは実はあまり定かではない。果たして何をもって「コミュニケーション」重視の語学教育というのか。実は巷の英会話学校の謳い文句程度の認識ではなかったのか、という危惧は拭いきれない。

TEE プロジェクトにおいて目指す「コミュニケーション」とは「言いたいことが言える」、「相手の言うことがわかる」、「必要な分野における文章を読める」、「必要な分野にとって適切な文章を書ける」という至極単純なものである。そして特に前者2つの能力に重点が置かれることになる。ここには社会的な会話の能力を含まない（もちろん挨拶や簡単な社会的なやりとりぐらいはできなくては困る）。一般に社会的な会話より専門的、職業的な会話の方が高度な英語能力を必要とするように思われているようだが、実際は逆である。仕事や学

業など目的的行動を外国語で行う方が実は容易なのである（が、本プロジェクトの目標はここである）。日本人はパーティーなどの社交の場におけるコミュニケーション行動（特にさほど親しくない人との社交的会話）が苦手だとされている。そのような社交の場において、ある一定時間以上コミュニケーションの状態を維持するのは容易なことではない。単なる言語能力以上の社会的なコミュニケーション能力が要求されるのである。

我々はネイティブスピーカーを生み出そうとしているわけではない。「アメリカ人っぽく（あるいは、イギリス人っぽく）」振る舞う人間を生み出すことを目指しているわけではない。少なくとも目的的コミュニケーション行動において、自分のいいたいことが言えて、相手の言うことがわかる、そのような人間を育てようとしているだけである。その中身については、共通教育だけが必ずしも関与する必要もないであろう。「中身」についてはもっと幅広い、あるいは専門的な教育がそこに関わってくるべきである（むしろ、「中身」のない言語教育はありえないが）。

TEE プロジェクトは、そのような目的のために、まず「日本語（あるいは母語）を介在させない外国語教育」を是とする立場をとる。日本語→英語、あるいは英語→日本語というプロセスは非効率であると考える。「英語で話せる」前に（できるだけ）「英語で考える」ことが必要だと考える。日本語を介さずに英語で表現すること、これがまず発信における目標である。受信、特に聞き取りについてはこの考え方は重要である。外国語を聞き取り理解する能力とは、単なる音声上の認識能力にとどまらない。その言語の語順において、その言語の表現形式あるいはレトリックとして即時に理解することを意味する。聞き取りにおいては母語を介在させる、文字通り時間的余裕はない。これがもっとも原初的な意味において、外国語をその言語で理解する教育が必要な理由である。

3. いくつかの実例が示唆すること

やや断片的ではあるが、具体的な事例をいくつか取り上げて考えてみよう。

日本人が世界的にも TOEIC, TOEFL などの英語試験のスコアの低いことはよく知られている。もちろん、受験者層が国によって異なっている（たとえば、エリートのみが受験する国もある）など、さまざまな要因があるためにこのランク付けは必ずしも公正ではないが、逆に日本人のスコアは世界的に見て高いのだと主張する論者にはお目にかかったことはない。少なくとも高くないことは事実として素直に受け止めるべきであろう。

その原因に関する議論は甚にも識者のあいだでもあるようであるが、本プロジェクトでは、アジアやアフリカの諸国（すなわち必ずしも言語系統的により近いヨーロッパの言語を使う国々以外の国々）の多くが日本よりも高いスコアを獲得していることに着眼した。そしてその多くの国において英語教育が英語でなされていることが日本の英語教育との本質的な違いではないかと考えた。ヨーロッパも含めて考えれば、英語が英語で教育されるのはむしろ世界の主流であろう。

それらの国における内実はさまざまである。自前で（自国語での）英語の教科書を作るだけの経済的余裕がなかった国もあるようにきく。マレーシアなどのように多民族、他言語国家であるがために、母語ではない英語が国内共通言語（intranational language）になっていることが要因であるような場合もあろう。その経緯はともかくとしても、身近なアジアに

我々のモデルがあるとも考えられる。これは後述する英語の非アングロサクソン化という世界的な流れとも符合するものである。

実は我が国にも好例がある。明治初期の高等教育である。当時の高等教育はすべて外国人の教師で授業はどの科目も英語（医学校はドイツ語）で行われたらしいが、日本人学生たちの外国語の能力の高さに感心する外国人教師たちの手記が残されている。そして明治中期から後期にかけて、日本人教師が育ち始め教鞭をとるにつれて、日本語で授業が行われる科目がしだいに増え、きわめて象徴的なことに学生たちの外国語能力は低下していったという。そのころの外国人教師の失望も手記に記されている。

もちろん明治維新前後の洋学塾などに通う人間は超エリートであったに違いなく、潜在的な能力が高かった可能性は否めない。が、その一方で明治中期後期に高等教育が極端に大衆化したということもないわけである。少なくとも現在から見ればやはりエリートたちだったはずである。外国語能力の発達には多様な要因が関わっており、英語で（日本語を介さずに）教育したから英語がよく出来るようになったと話を単純化するつもりはない。しかしながら、明治期におけるこの相関が仮にもあるように見えるとするなら、英語教育がある種の閉塞状況にある昨今、これを何らかの形で試行する価値はあるように思われる。

4. New Englishes と英語教育

日本人が母語ではないところの英語で（すなわち英語非母語話者が英語で）英語教育を行うことについての是非も問われるところであろう。一昔前の英語を学習する人たちの動機は圧倒的にイギリス、あるいはアメリカの文化、特にその主流をなすと考えられてきたアングロサクソンの文化にふれたいというものだった。対人的なコミュニケーションのモデルとしても英語を話す相手はいわゆる英米人ということになっていた。しかし世界は急速に変わった。現在英語を母語とする人たちは約3億人だが、自分の母語以外に第二の言語として英語を国内で話す、あるいは話さざるを得ない人たちがいる試算によるとこの地球上に10億人はいるといわれている。つまり、英語を母語とする人よりはるかに多くの人が母語以外に英語を使っているということである。

例えば、先にも述べたマレーシアのような多民族国家では何を共通の言語とするかは大きな問題となる。もちろんマレー系の人たちはマレー語を、中国系の人たちは中国語を共通語とした方が都合のいいことが多いだろう。その他の民族の人たちも同様である。しかし、マレー語を共通語とすれば中国系その他の人たちは不利益を被るし、中国語を共通語とすれば今度はマレー系その他の人たちの不利益となる。利益、不利益の問題だけではない。民族的な感情の問題にもなる。そのような状況でその有力な双方の民族にとって等しく外国語である英語を共通語とするという選択がなされているのである。

このように英語がもともと母語ではない人たちが日常的に英語を用いるということはどのような事態を生み出すだろうか。シンガポールでも同様であるが、その人たち固有の英語のバリエーションが生まれてくるのである。いわゆる“New Englishes”である（Englishの複数形）。インド人の英語もまたそうであり、日本人の英語もまたそう思われている。もはや英語はアングロサクソンの文化的な背景をもった言語とは言い切れない状況になってきている。これがよいことか悪いことかということを論じることは可能だが、現実はその次元をす

でに通り越して論じている暇はないという状況である。英会話の教本や学校の英語の教科書の対話例を見ると、その多くにアングロサクソン、アングロアメリカ的な習慣や文化的な背景が見え隠れするが、もはや我々の英語を使う相手は英米人とは限らないのである。

日本人的な英語とかインド人の英語というような言い方を耳にすると、それがアングロサクソンの文化的歴史的背景をになった正当な英語の亜流のように思う人もあるかもしれないが、本プロジェクトとしてはそれは正しい認識ではないと考える。仮に正当に対する亜流であると認めたとしても、それは我々にとって意味のある亜流である。繰り返すが、我々はネイティブスピーカーを作り出すことを目指しているわけではない。もちろんコミュニケーション不能に陥るほどの自己満足的な英語になってしまってはならない。日本人だけに通じる英語であれば何の意味もない。その意味でネイティブスピーカーによる英語教育の必要性もきわめて高い。しかし、ネイティブスピーカーによる「英会話」と「英語」の「分業」は妥当だろうか。次節ではそれを考えてみたい。

5. 「英会話」を問う

「英会話」の「訳語」である“English Conversation”ということばに日本にきて初めて接したという英米人は少なくない。まことに奇妙なことばである。ある言語を学ぶことにおいて「会話」だけが特化される理由はどこにあるだろう。「会話」のない言語使用を考える方が困難である。言語の使い手は当然にして「会話」もするのである。日本の英語教育における「読み書き」と「会話」の「分業」を如実に表していることばである。

TEE プロジェクトの基本理念はこの「英会話」的発想を排除する。どのような外国語トレーニングであれ、そこに「会話」も含まれているのは当然である。従来の「分業」スタイルが学習者の読み、書き、聞き、話す能力のネットワーク形成の妨げになっていると考えたい。

英語のネイティブスピーカーの教師の下で教育をうければそれは「英会話」であり、日本人教師のもとで教育をうければ「英語」という区分にいかなる合理性があろうか。「英会話」ということばにどことなくつきまとう軽佻なイメージはそれを担当するネイティブスピーカーの教師にとっても不幸なことではないだろうか。より総合的な英語教育を志すネイティブスピーカー教師にとって「会話」という制約が足枷となるなら、学生にとっても不幸と言わざるをえない。

ある種のフォーカスが言語教育におかれることには合理性があるであろう。しかしながら、英語によって英語を学ぶことと日本語によって英語を学ぶことの「分業」に合理性はないと本プロジェクトでは考える。「読み」、「書き」、「聞く」、「話す」のそれぞれにおいて英語で思考することをベースとして考えたいのである。

外国語教育において、母語を補助的に用いることの効率性についてはある程度の妥当性もあろう。しかしながら、「補助的」がなし崩し的に「中心的」にならないためにも、中途半端なスイッチが英語による思考の妨げにならないためにも、「特色あるカリキュラムづくり」のためにも、少なくとも試行の価値はあるのではないか。本プロジェクトはそのような世界の常識であり、日本の非常識であるところカリキュラムに向けての試みなのである。

6. おわりに

実施への道は容易ではない。日本人の教師の大多数は伝統的な日本の教育を受けており、それぞれに独自のスタイルを築きあげている。もとよりそれを否定するつもりはない。日本語による英語教育がすべて悪いといっているのではない。しかし、それを捨て去るという犠牲を払いながらもこのようなプログラムを実行する意味は実際の教育的な効率性以上のものがあると思われる。信大生全体のアイデンティティとして機能する可能性もある（そのような事例は某私大のインテンシブ英語プログラムにあると聞く）。

現実には英語で英語教育を行うことに難色を示す教師はいるだろう。しかし、それはただ慣れていないだけなのである。筆者は英語で英語教育を行うようになってこれで3年目になるが、最初の1年目は正直言って満足には出来なかった。しかし、適切なFD講習がなされ、すぐれたモデルがあれば、それぞれの教師が自らのスタイルを新たに築き、よい教育ができるであろう。そのような潜在能力はどの教師にも備わっていると信じる。現在信大にいる外国人教師の中にも当然そのモデルとなりうる人材がある。

やや話が本質からそれるようではあるが、筆者が英語で授業を行うようになって、一つ大きく変わった副次的効果がある。学生は一切私語をしなくなったのである。時に危うくなる筆者の英語に真剣に耳を傾ける（私語もしなくなったが、必要なことも言わないという問題もあるが、それは日本語でやっても同程度である）。学生が何を欲しているか、その現場にたてばわかるはずである。筆者も伝統的な日本の英語教育を受けてきたものであるが、モデルとなるような授業があればどれほどこの試みが容易になるだろうと思う。FDは必須のものである。

学部科目を英語で行うことには懐疑的ではある（筆者は人文学部の「英語学演習」においては行っているが）。留学生から見ても、日本の大学の授業を日本語で受けることになんら不自然さも「非国際性」もないはずである。しかし、共通教育における「英語」は「英語」のトレーニングの場である。日本人同士（教師と学生）が英語でやりとりするのは奇妙だという声もあるが、トレーニングの場として考えるならば、むしろ英語を日本語で学ぶ方が奇妙であろう。

どちらかというと思評の高い日本の英語教育に一石を投じることができればこのプロジェクトの目的の一部は達せられることになろう。それだけでなく、実は日本の英語教師たちの潜在的能力の高さを示す好機となると信じる。